

富山 如大地

— 第146号 —

発行人
幽溪 浩

発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
教区・別院ホームページ 富山東別院 検索
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



もくじ

・富山別院報恩講話 藤本 愛吉氏	2~22
・ハンセン病問題全国交流集会	23~25
・教区だより	26~27
・研修会報告	28

ハンセン病問題全国交流集会

✿一年を振り返って✿
今年も一カ月が経ち、年明けの忙しさも落ち着きつつある。

昨年は元号が『令和』になったことが記憶に新しい。新しい時代が訪れたという感覚はあまりないが、増税や台風による災害などの暗い話題が印象に残っている。じっくりと振り返ってみると、楽しいことや嬉しいこともたくさんあるのだが、真っ先に出てくるのは暗い話題が多い。

個人的に思うのは、私たちは物質的には恵まれた環境で生活しているが、一方ではそれを失うことへの不安があるからではないだろうか。できればお金をたくさん払いたくないし、災害にも遇いたくないというのが本音である。そういった普段あまり口にすることがない考えが、身近に発生したできごとがきっかけで思い起こされるのだと思う。

毎年十一月からは門徒さんの報恩講があるが、昨年はそれに加えて法事や葬式が例年以上に多かった。そうなる、働くことが課題を消化するといった感覚になり、自分がやっていることの意味を考える余裕がなくなっていく。少し落ち着いてきて余裕が出てくると、多くの反省や後悔が出てくる。

自分は報恩講でしっかり教えにふれただろうか、流れ作業的に過ぎ去っていないだろうかと思ひ起こす。親鸞聖人は迷いや苦しみの中で九十年の生涯を送られたが、そこから私たちが学ぶべきことは困難を避けることや、乗り越えることではなく、その中でどう生きるかということではないだろうか。

第十二組 勝楽寺 藤田 徹

【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？



二〇一九年 富山別院 報恩講法話 〔二〇一九年十月六日～八日〕

「教えを聞き開く」

三重教区 中勢二組 正寶寺 住職 藤本 愛吉氏

〈二日目〉初逮夜法話

三重教区、三重県津市から来ました藤本愛吉です。

私はお寺へ養子に行ったのですが、愛知県みよし市の真宗門徒の農家の七人兄弟の六番目として生まれました。貧しく本当に大変だったので、小さいお内仏もありました。一九九八年に亡くなった母ちゃんが竈で炊き、そのお仏飯を私が入れる係でした。お仏飯を入れて、チーンと一つ鳴らして学校へ行ったことを思い出します。また、近くのお手次寺に、お菓子を目あてに報恩講の『正信偈』の勉強に行きました。小さいころはお菓子をもらえなくて本当に辛い思いをしました。五十九歳の時に脳出血をし、右半身麻痺で足も歩けない、

手もぶらぶら。喋るのも大変になったのですけど、二カ月のリハビリで、皆さんが十だとしたら六まで回復させてもらいました。

さらには、一昨年、長崎で心臓を悪化させて、三カ所病院を巡って、最後大きい長崎県佐世保市にある集中医療センターで手術してもらい、一カ月半くらい入院しました。

愛する妻、恵さん

私たちは結婚して三十五年経ちました。「愛吉さん」というように「さん」を付けてお互い呼び合っています。彼女は放送部に入っていたこともあり、きれいな日本語で話します。お顔はまた三重県一番の美しさで。ただ心に角が生えていることは見えませんでした。今、その角がずいぶんと出てきて大変ですが、仏さんのおかげで一緒にいます。今も「愛吉さん」。だけど、たまに、腹が立つと「さん」を抜くのです。そうすると呼び捨てに聞こえる。「愛吉」。私は九つ上なのに。今まで太陽のような声で「愛吉さん電話ですよ」「愛吉さんお客さんですよ」。それはもう空気が澄んで綺麗です。その声に、部屋中の空気が一遍に温かくなる。それが、時々「さん」を取るのです。そうすると、障子でも

「棧」が取れたら動かないです。私たちの関係も「さん」を取った時は動かないです。

私は、三十数回お見合いをしました。三十数回目に本山の御影堂で恵さんとお見合いをしました。私は遅れて行ったので、前の方を向いて綺麗な姿勢で、後ろ姿が素敵だった。それで、近くのお蕎麦屋さんに行き蕎麦を食べながら、「あなたのおうちはどんな関係ですか」、「どんな人がいますか」、「おばあちゃんはどうな人ですか」と言ったら、あの美しい顔から一筋の涙が流れました。すでにおばあちゃんは亡くなられていたのです。その涙が素晴らしい。「あんたさん、うちの孫の恵と一緒にってなあ」というように聞こえました。耳がいいですから。私たちは結婚しました。今、三人の子どもに恵まれて私は七十二歳になり、彼女は六十四歳の道を歩んでおります。

少年期、三つの憧れ

お経が縦糸だとしたら、人生一年一日が横糸です。結婚して三十五年横糸を組んできました。いろんな一日、いろんな時間がありますけど、それが、私にこういう人生を歩ませてくれています。その私が、農家で生まれて七人兄弟

の六番目。金持ちになりたいな、プロ野球選手になりたいと思って頑張ったのですが、わりでした。頭は良かったけど大学は落ちました。

大学は落ちましたが、小学校六年生の時にいい先生に出遇いました。五十五人ぐらいのクラスで授業を受けていたのですが、ある時、後ろの方で喋っていたみたいで、五、六年と受け持ってくれた先生に「前出て来い」と言われました。

私は帽子をかぶっており、前に出た瞬間、先生から強烈な張り手にかかりました。そしたら、この素敵で私が、おしっこをシャーっと。あまりに急にほったたけられたものですから。そして、バケツに水汲んで廊下に持って立つてろと。昔は先生っていったら絶対抵抗出来ません。ただ敬う、謝るだけ。そういう厳しい時代でした。自分が授業中に喋って帽子をかぶっていたことを気付かずに叩かれたから私が悪いのですけど、だんだん腹が立ってきて、根性は先生に対する憎悪です。その後、先生から教室に呼び出されて、小さな白い封筒を出して、「今日これを持って家へ帰りなさい」。そういう先生でした。私はもう、帰ってやるわという根性で鞆かぼんの中にバーンと教科書を入れて帰る途中で、その封筒をちよつときつめに破って中身を見ました。そしたら先生が「五年、六年と君と一緒に

にやってきた。でも今思うことは、君は自分を大事にしていない。寂しい。辛い、一緒に勉強していて。自分を大事にしてな」。その時、初めて悔し涙でなくて嬉し涙が出ました。先生に愛してもらっている。とても嬉しい。私はプロ野球の選手がだめなら学校の先生になりたいと、自分の担任のような先生になりたいと。

もう一つは、友だちに浄土宗のお寺の子がいて、その子は品ひんが良く優しく頭が良くて、よくその子のところへ遊びに行きました。畑で手ぬぐいをほつかむりしたお母さんが汗をぬぐいながら、「ああ愛ちゃんまた来てくれたね。来てくれてありがとう」。そのお母さんはうちのおふくろと比べると桁違いに美人。

うちのおふくろは百五十センチぐらいで、ずんぐりむっくり。私は嫌いでした。六歳ぐらいから嫌いでした。小学校へ上がった時に、私だけ保育園に行っていないから字が読めませんでした。がみんなは読めました。すごく恥かいて母ちゃんに「字を教えて」って言ったら、母ちゃんは小学校三年生しか出ていませんでしたので、かろうじてひらがなを覚えていた程度で九九も出来ません。そのあたりから母ちゃんを軽蔑していました。

だけどその浄土宗のお寺の奥さんは雰囲気も

言葉もきれい。ああこんなお母さんがいいなとずっと思っていました。そして花まつりがあつたりすると、お寺は静かで涼しくていいなと思いました。

私には、三つの願いがありました。「プロ野球の選手」、「学校の先生」、「お寺の坊さん」。プロ野球の選手は先ほど言いましたように、無理でした。その次に学校の先生になりました。最後にお寺の坊さんになりました。

玉川大学での出遇い

学校の先生になりたかったのに、普通の高校へ行き、選んだのは理数系です。先ほど言いましたが頭が良い。国立の一期、二期、担任の先生は「絶対受かる」。私もそう思っていました。それが国立の一期、二期、M大学とAK大学に見事に落ちました。大学が間違っていたのです。落ちたら働く決めていましたので、私は社会人になりました。二十四歳の時、本屋さんにふらっと立ち寄りましたら通信教育で学校の先生の資格を取れると書いてありました。すぐ願書を出しました。そしたらやつぱり頭が良かった、合格でした。ところが通信教育は、願書を出せば全員合格です。試験がないのです。

後で気がつきました。

それで私は二十四から二十八までの間、会社を四十日間休んで、東京の玉川大学という学校で直接授業を受ける。後は全部レポートです。

全部で普通の大学生と同じ百三十二単位、インド哲学史を取りました。高校で倫理社会の先生になろうと思いました。仏教もちょっと興味があつて禅宗の本を特に読んでいましたが、あらためてその大学でインド哲学史の授業を二時間だけ受けることになりました。私は道元研究会に入っていました。その顧問の先生が素晴らしい先生で、「愛吉君、君、今度インド哲学史を受けるのかい。その先生はぼくも尊敬してるよ、よかったね」とおっしゃっていました。だけど私は、根性が曲がっていますから、大したことないと思っていました。それから、私はその先生の授業を受けました。五十人ぐらいいました。まず歩いてくる姿に感動しました。しずしずと歩き、まっすぐずっと遠くを見る目がすごく品ひんがありました。そして後ろに短大の女性が付いていました。なぜか先生の後ろに授業に係なく短大の女性が三、四人付いて一緒に聴講されていた。初めてそういう人を見ました。先生に付いていく。そしてなぜかクリスチャンの学校なのに、数珠を持たれて静かに立たれて「南

無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」。私、浄土真宗の門徒の家ですが初めて感動しました。みなさんもお会いしたら、「この人は」と感動すると思います。ただ、その後親鸞さんの勉強していたのはクラスで私ともう一人。二人だけです。

大学の先生との思い出

でも、その時の授業の雰囲気は静かな空気が流れていました。私たちは、その先生から、たった二時間授業を受けただけですが、それが四十八年間続いて今に至っております。忘れられない授業でした。そして、ほとんど勉強、しゃべられたことを全部わからないなりにノートして、今もほとんど覚えております。貴重な二時間でした。初めて、お念仏がお念仏として聞こえるような雰囲気でした。そして、威厳がありました。『嘆たんふつ仏偈』という御経には、

光顔巍巍こうげんぎぎ、威神無極いじんむごく

(『仏説無量寿経巻上』真宗聖典 一一頁)

とありますが、全くそのとおりのようなのでした。なぜかと言うとその先生は阿弥陀さんの心をいただいていた。そんな中で授業をされる。



藤本 愛吉氏
(三重教区 中勢2組 正寶寺 住職)

そんなこと、私は見たことも聞いたこともありません。その方は、お念仏がピタッと心に入っているような方でした。

こんな話をされました。「皆さんは、まだ途中なのです。ほとけさまの教えは、私たちにまだ歩みが途中なことを教えてくれるのです。人間は、二度目覚めるとのこと、二度生まれるといふことがあります」「種のいのちと同じですよ。種は種のままでは、本当に種のいのちを尽くしたといえない。大地に蒔かれて日を浴びて水や肥やしの中で、芽が出る。そして花が咲く。もう一つ実を付けてこそ、種のいのちが実ったといえる。そういうふうには私たちがいのちも、ほとけさんの教えに目覚めて行くと、いのちの花が咲きます。ゆつくり聞いて行かれた

らどうですか」。

それを『花伝書』といわれる能の話をされたとき、「世阿弥も同じことを言ってますよ。芸の道でも同じですよ」「人には、二つの人のかたちがある。一つは時の花、時分じぶんの花、時ときと書いて分ぶんと書いて、時分の花。若いときの美しさ、自然の美しさで、これは、時の花といえますよ。それは、失われて行きます。失せると書いてある。でも、芸を本当に深めて行くと、もう失せない、失われない一つの域がある。それを、誠の花というのです」。世阿弥は『花伝書』の中でそう言っています。私たちもそうなのです。人としての一生は、社会人となって、家庭人となって大きな仕事がありますけど、もう一つ、目覚めるといふこと、そういう大きないのちのからくりの中で、秘密の中で、私たちは、いのちを受けているのですよ。ただ、その時に、よき人に出遇えるかどうか、蓮如さんが同じことを書いています。よき人に遇ったら、

あのごとくならではと、思えば、なるぞ
(蓮如上人御一代聞書 真宗聖典 八九〇頁)
と、同じです。

社会人となつて

私も七十二歳になって、つくづく思います。二十四歳のときにその先生に、よくぞ遇えた。仏法を生きている人に遇えた。他の五十何人のほとんどは、そう見えなかったかもしれないでした。私は、なぜか、やんちゃだけ見えてしまいました。見えた瞬間、その先生に教えてもらいたいという心が出てきました。

私は、先生が怖かった。だいたい、初めは、怖い。だけど、短大の女子学生の方は先生にあたたかさを感じて付いて行きます。それがわかりませんでした。私は自分で京都へ行って、本を買って一人で悟ろうと思って、三十六歳まで、十二年の間もう何百冊と本を買ってコツコツと、教育書と一緒に仏教書を読んでいろいろしましたが、結局、無理でした。

それから、教員になり、校長先生やPTAの方にアパートを紹介してもらいました。当時三十六歳、独身。土曜、日曜になると、子どもたちが私のアパートに遊びに来たり、泊まったり、好きなことをしておもしろかったです。

しかし、私には、ひとつ宿題がありました。あの目覚めです。当時、七十前後が平均寿命で

した。「人生の峠に來たなあ」と。

ペロの思い出

私の人生を少し振り返ると、父ちゃんのこと、亡くなった姉ちゃんのこと、一緒にランニングなどした雑種のペロのことを一番、思い出します。私はたびたび、野球が終わってから、ペロと一緒に田んぼ道をランニングしていました。ペロとはひっくりかえってノミをとる習慣がありました。

ある時、兄貴が、急に私に言いました。「おまえが大事にしとるペロ、毛がぬけてきたやろ。俺も子ども出来たからな、ペロの病気が自分の子どもに移ると、心配だから、保健所で処分してくれんか」と。私は、姉さんが苦労しとるのを知つとる。貧しくても一生懸命、やってくださっている。そう思ったときに、私は、いのちにリンクを付けて、「わかった」と言つて、保健所へ「引き取りに來てください」と電話しました。

その夜から犬は、鳴き続けました。クーン、クーン。犬と人間の違いはありますが、いのちの流れは、いのちのところで繋がっているんでしょうか。とにかくずっと朝まで鳴くのです。

その後、檻おりを積んだ軽トラックに乗つて保健所の方が來ました。大きい針金の丸い穴のついたもので、ペロの首を、ギューツと絞めました。口が開けなくなりましたので、だっこして檻に入れました。保健所の方から「これで、最後ですが、いいですか。引き取り手がなければ、処分されます」。

後ろには、赤ちゃんを抱いたお姉さんと兄貴がいます。私は「いいです」と答えました。その間、ずっと、ペロの目と私の目があうのです。私の生涯の中でも、こんなに深い経験は、あんまりないです。

如来を信ずるとは

信國淳のぶくにあつし先生は、如来さんを信ずる「信」というのは、ビリーフ (belief) ではないのです。それはこつちとあつちと別々に信じあうものなのです。ビリーフは一つじゃないのです。一つであるのは、「フェイス (faith)」と言いますとおっしゃいました。

ある時、先生は、授業で「犬の顔、目をみてごらん」と言つて、犬の写真を回しました。一人の学生が、「いい目をしていますね」と言いました。それがフェイス、一つなのです。三昧さんまいと

言います。そういう世界に私たちは生まれてきたのに、心がいつの間にか分れます。本当に私と恵さんは一つのつもりでしたけど、朝から晩まで大騒ぎしています。それでも子ども、孫に恵まれました。孫たちの姿はほとけさんとそっくりです。一歳のいとちゃんが、少し立ち上がりがけたころ、じいちゃんの私に身体をあずけて「だっこ」。恵さんのところに行き「めえちゃん、だっこ」とせがまれ、うれしそうな顔をして恵さんは「いとちゃん、いとちゃん」。孫のいとちゃんにではなく私にして欲しいです。いくつになつてもねたむ心は一緒です。

私は、三十六歳のとき、小学校でいい先生に出会い、犬と最後の別れをしたときに、「さみしいな」と感じたことを思い出しました。そして、自分の人生について、このまま学校は楽しいけどやっていけるかとPTAの方に信頼され、校長先生や仲間にも大事にされて、子どもたちとも仲良くしていましたので、いうことはありませんでした。当時、子どもたちに「カラーツ」と言つたら、「ごめん先生」と返ってきました。すごいです。今、「カラーツ」って言つたら教育委員会が出てきます。私は五年生を担任していた時、切ない思いをしました。運動場を使わず公園でソフトボールを教えていて野犬が出まし

た。私は「逃げる」と言いました。でもよく見たら私が一番先を走っていました。それで一番後ろの子がお尻を咬まれてしまったのです。菓子折りを持ってその子のお母さんのところに行き謝りました。「ごめんなさい、私、先頭に走ってしまったから」と。お母さんは「先生は何も悪くはありません、うちの子どもがドジなんです」と。そういう時代でした。

それから、キャンプに行ったことです。子どもたちが遊んでいるところに切り株があり、大きな穴が残っていました。そこへ子どもが落ちたのです。おしりにケガをしました。これでもう学校はクビになるなと思いました。親に「不注意で、すいませんでした」と謝りました。親は「先生が悪いではありません。うちの子がダメなんです」。そうやってあのころは私を親ごさんが助けてくれました。今の時代では全部クビでしょうか。それは何が違うのか、ひとつは信頼です。深い信頼です。ほとけさんと私たちの関係は深い信頼で繋がっていると言われているが、私たちはなかなかほとけさんのことがわかりません。

小さいころはそうでもないのですが、大きくなるとだんだん自分の外に世界を創ります。それで世間を創っています。その中で敵、味方に

分かれて戦争をしたり仲良くしたりします。それ子どもたちが見て、異和感を覚えるのです。

当時、私はほとけさんの世界がまだわからず、つらい状態でした。このままではもったいないと思っていました。産休の代理の先生をしていました。長いときは一年、短いときは三カ月で次の学校に移りました。十年で十六校くらい六百人。一年生を担当することが多かった。私は産休代理で後から入学するものですから、子どもたちはいつも「先生、よくきたね、お迎えの歌、歌ってあげる」と「シャボン玉の歌」を歌ってくれました。リズムよく、手を後ろに組んで歌っていました。

「シャボン玉」の歌は、作詞した野口雨情さんのお子さんが小さい時に亡くなり悲しみを表現した歌だと聞いていたので説明しました。

私は子どもたちに「せっかくだから、こういう歌だからね、一緒に歌ってみようか」とオルガンを弾いて子どもたちに歌ってもらいました。子どもたちはスーッと言葉に感動していけます。自分の身近なおばあちゃんが亡くなった、飼っていたハムスターが亡くなった、それを感じながら静かに歌うと、深いです。今日は皆さんと一緒に「シャボン玉」の歌を少し歌いましょう。《合唱》

すぐに言葉に同化し泣いている子がいました。私たちは知識がついて知恵がついて、分別があります。そういうこともあつて私はこの素敵な仕事を続けていたのですが、自分の最後の課題に決着がついておらず、仏法もわかっていなく、つらかった。それで二百万円貯金し、京都の大谷専修学院に入りました。そこで『いのちは誰のものか』というすばらしい本を読みました。「いのちは誰のものか」といのちが叫んでいる。つい、いのちを粗末にする私たち、いのちはそれでいいのかと言っている。「いのちの声が聞こえるか」、すばらしい本です。その大谷専修学院は本山に願い出て全寮制の学校にしてもらっていたのです。生活をとおして仏法を学ぶ場です。全寮制で共同生活でなければ仏法は学べない、全寮制は共同生活で家庭と一緒に。隣に人がいます。その人と御同朋おんどうぼうとして深い交わりができるか。ヨイ、ドンで一部屋に二人以上で生活します。

当時の竹中智秀たけなかちしゅう院長からは「ここは念仏の道場だ、ここで愛吉君育っていきなさい」と言われ、私はレポートを書いたら、児玉暁洋先生こたまきようが「君まだ不十分だな。落第」、二年目になったら竹中先生は、「君、もう少しだね、残ってやりなさい」と家族まで一緒になって、学生さんと一

緒に二十五年程いました。その院長先生も七十四歳で亡くなりました。貴重な体験でした。なぜか、その学校には本尊、阿弥陀如来がいつもおられます。かたちだけではない、その願いに目覚めた先生方。言葉がすばらしい、声のかけ方が違う、仏教を習うとこういう豊かな広い大きな心になって、素直にもの言えるのだなあと思いました。ケンカをしても後で素直になって一つになっていく。それを目のあたりにしました。



〈二日目〉晨朝法話

願い

大谷専修学院の門をたたいたら、実に多くの方が真剣に仏法を学んでおり驚きました。私は、仏門の方とはほとんど無関係に生きておりまし

たから、仏門の方が、聞法されているのを見たのは非常に幸せでした。仏法をきちんと学んできている方、尊敬できる方が多勢いました。私は、何かを得た人しか尊敬できないという根性でしたが、真剣に求めて得た人を見るということは、本当に自分もその道を行けばいいのだと。そしてその先生たちのお話を聞くと、実に潤いがあり、響きがある。それが原点でした。

人間は生まれてから三歳くらいで分別がついて、あれがしたいこれがしたいと言うようになります。昔の卒業文集には皆そういう思いを書いています。優しい人になりたい。強くなりたい。弱さを大事にしてそこから逃げないようにしたいとか、小さいなりに自分はどう生きたい。そういう文章がたくさんありました。しかし今は、どれを見ても自分の夢ばかりで、切ないです。出来ることと出来ないことがあるわけですから、その夢がつぶれたらいいける。和田^{わだしげ}稠先生は、

「その本当の願いとは何でしょうか」

「私たちはみな今まで経験してきた自分の世界の中で、これが人生だ、これが人間だと思ひこんで生きているのです。世渡りをしているのです。それでどれだけ

うまく世渡りをしていても本当のところ孤独で、むなしく、物足りないのです。いのちの願いが満たされていないのです。その願いとは、人間はおろか地を這うものも空を飛ぶものも、いのちといのちが共鳴しあい、通いあう世界を共にしたいという願いです。浄土の願いです」

（『大聖寺教報』より）

もともと私たちが願っているいのち、それ自身が願っているいのちはこのなですとおっしゃいます。人の何百年の歴史があらうと、貫くのはこれ一つですと。「浄土の願いとは。本願とは、いのちといのちが通いたい、通じあいたい」と、これだけなんだと。

竹中先生は、「私たちは心の深いところでは、皆共に生きたいと願って生きているのです」と和田先生とは違う言葉で語られました。皆さんどう聞かれますか。私は二十年、竹中先生のそばにいさせてもらいましたが、先生はもう自然と呼吸するように言葉が出てくるのです。願いに出遇って触れていましたので、それが言葉として自然に出てくるんですね。善導大師は「深い」という言葉を大事にされておりますが、私たちは心の深いところでは、皆共に生きたいと

願って生きているのですと。

地獄だな

これはある高校生の短歌です。

地獄だな 言葉通じぬ 人たちが
いやでも同じ 家に住むとは

これは生活で感じたことを書いています。比叡山に行ったわけではない、焚き木の上を渡るわけでもない、滝に打たれるわけでもない。この私たちの何気ない日常生活のど真ん中で若い高校生がつぶやいた言葉が川柳になっています。「地獄だな」、こんな言葉は私たち日本人では一応通常語です。それほど仏教は染み通っています。

私はこういうことをとおして、全寮制の一部屋二人以上で生活をして御同朋の交わりが出来るから専修学院に行きました。あえて十八歳から八十歳ぐらいの方が八十人から百人、今は四十人ぐらいですけど、皆でヨーイ、ドン。先生も一緒です。御同朋・御同行の生活実現です。願いをかけられておる。それがわかればまた違うでしょうけど、一応言葉として聞いてい

る。これは呼びかけです。

そういう私たちの生活のど真ん中で、片一方は本当の願いがあるのですと、共鳴して響きあう通いあう世界が本当なのですと。一方で、何も学んでいない高校生が、日常の生活の中で自分の家では言葉が通じないことがあるんだと。自分が通じあわなくなったのか、お父さんお母さんがそうなったのか。自分が外に出てそういう家の中の交わりを見てみると「ああ、つらいなあ」と。何で一つの家にいながら、同じ屋根の下でお互い苦勞をしながら、なぜ背を向けていくのか。どうしてそんなことを一高校生が生活の中で感じる事ができるのでしょうか。そこにはきちんとほとけさんの願いが入っているのです。だから言葉が通じないのがつらい、地獄だと、さとするような言葉が出てきます。

聞思

大谷専修学院は一年制の学校で、多くの学生さんがお寺に帰って行かれます。私は、もともとと在家の出身で坊さんになるつもりはありませんでした。ただ教えを聞きたい。目覚めていきたい、でもやはり最後には寺に行った方がいい。親鸞聖人のそばにいつもいたいな。門徒さんに

いつも守ってもらえたらいいな。そういうふうにしてお寺に養子に行きました。これが京都で私が学んだ全てです。

日常生活こそ聞法の現場、修行の現場だと。

『いのちは誰のものか』を書いた信國先生の言葉を紹介します。先生は御所を歩いていった時にお念仏に出遇われました。

生かされて 生くるなりけり しみじみと
めぐみを思う 我ならなくに

とおっしゃいました。生かされていると気づいたのですが、ずっと持続されているわけじゃない。悲しいけれど、でも生かされているんだと。生きるのではなくて、生かされてとずっとその言葉が離れないのです。どこで生かされてと。大きい広い世界に出遇われたのか。その先生の言葉のとおり「如是我聞」といただきましたいものです。

嘘

前にも話をしましたが、私は産休になる先生の代わりとして一年生、二年生を担任することが多かった。時々自分からやらせてくださいと

言って五年生。障害のある子たちの授業をしたり、一時間で一年生・二年生・三年生の授業をするという、無茶苦茶な内容もありました。それでも特別に目をかけ心をかけて、少しでも学力が上がるように、人間的な向上が出来るようにという願いでやってきました。やはり一年生・二年生はすばらしい。やんちゃも含めて全部すばらしい。一番の良さは、嘘がない。これは人間の原点です。

お釈迦さまは、在家の私たちが仏法に目覚めるにはどうしたらよいかということに対して五つのことを、こういうことをしたら仏さまの心に目覚めます、仏さまの世界に出遇えますと教えてくださいました。一番最初が「不殺生」

(慈しみの心を持って、人を傷つけない)そして「不妄語」(嘘をつかない)・「不邪淫」(不道德な交わりをしない)・「不偷盗」(盗まない)・「不飲酒(不邪見)」(酒を飲まない)。この「不妄語」は嘘をつかないようにということで、それは「戒」、戒めです。こうやって生きなさい、そうしたらほとけさんの世界に出遇うと。

私たちも学校教育において、そのようにしています。そこで何を知るかと言うと、人間の姿を知る。嘘をつかずにおれないという自分が出てきます。嘘をつくくと、信頼関係がなくなるの

です。そんなことを言われても、嘘をつかずにおれない生活があるのです。そういう悲しい人間の生活の実態を、お釈迦さまはよく見ておられました。どんなに言われても、嘘をついてしまふ。人間とは何かという時に、お釈迦さまは私たちに慌てずに一つこのことを守ってやってみなさいと。それが在家の私たちの生活にきちんと示されています。



〈二日目〉結願逮夜

教えで見つめなおす

昨日から「教えを聞き開く」というテーマでお話をさせていただいています。淡路島の家庭科を志望した男子高校生の物語をします。

女子ばかりの高校で、男子二人だけで家庭科で裁縫とかいろいろやるわけですから非常に大変だったと思うのですが、卒業式にあたって、

その二人が考えたことは、今までお世話になった、ちょうど六十歳ぐらいの退職される女性の先生にお礼を言いたい。先生の退職を「教えてくれてありがとう」という日にしたいということで、自分たちでチラシを作って、その先生から教えを聞いてきた先輩、卒業生に手紙を書きました。赤ちゃんを抱いたお母さんとか、何十人かに集まってもらい、先生には内緒で講堂に来てもらい「教えてくれてありがとう」とやったとのこと。しかし今の子どもたちは、この歌を知りません。

仰げば尊し 我が師の恩

つまり先生と生徒という関係でしかなかった教わらない関係が、今はもう皆無です。先生は、たくさん生徒に教えてこられた。しかも初めて丁寧な男の子の家庭科の生徒に関わっていかれた。その気持ち二人の男の子に伝わるのです。伝わった結果、先生にお礼を言いたい。恩を受けたことを感じている。私も何回も『恩徳讃』を歌っています。時々感情がこみ上げてくる時がありますが、あの純粋な高校生の二人の師の恩を、親の恩、大地の恩、歴史の恩、自然の恩、環境の恩、そういうものを私たちは感じて生きているか。最後に先輩は「仏恩、ほとけさんの恩が深くあるから、こうしてお互いに生

きている」。言葉では教えてもらいません。実感として感じるかということです。なかなか遠いのです。私たちは、このような勉強ができるのは不思議な一つの縁です。

蓮如さんのお言葉に、私たちにこういう場を是非もっていただきたいという言葉があります。

「仏法には、世間のひまを闕きてきくべし。世間のひまをあけて、法を聞くべきように思う事、あさましきことなり。仏法には、明日と云う事はあるまじき」由の仰せに候う。「たとい大千世界にみたらん火をもすぎゆきて 仏の御名をきくひとは ながく不退にかなうなり」(讃弥陀偈和讃)と、『和讃』にあそばされ候う。

(『蓮如上人御一代聞書』真宗聖典 八八二頁)

これは蓮如さんのお弟子さんが言葉を書きとめた『蓮如上人御一代記聞書』の一節です。「闕きて」というのは、削つてもという意味です。私たちは経済生活が全てです。いのちを生きている実感がだんだん遠くなりました。いのちは限りあるものです。歳をとっていくものです。機能が奪われていくものです。そういういのち

として、この世に生を受けました。だけど、そこに素直にそういう自分と一つになって、自分を成就していく道があるかということです。やっぱり自分のところに、世間のことにフラフラして自分の落ち着きどころがない。蓮如さんは同じ構造をもった世間に生きている私たちに、なんとかほとけさんのところ、教えに目覚めてほしいと願われて門徒さんたちと、少ない人数でも丁寧に関わりをされて、そしてこういう言葉のこされた。「世間のひまを闕きてきくべし」

今、皆さんがこうして大事な一日の、いのちのかぎり、この場に足を運ばれたということ、は、蓮如さんのおところが届いているからでしょうか。

生活を通じた仏法

今日もこちらに、大谷専修学院で、一緒に同じ釜のめしを食べた、同じ班で暮らした友だちが来ています。全寮制で寝食を共にし、ぶつかり合い学ぶのです。それでないと仏法を学べないというのが、全寮制の学校を作った信國先生の初めの願いです。仏法は全寮制でなくてはダメなのです。生活のど真ん中で学ばなくては駄目がいります。それを皆さんきちんと地_じでやら

れている。

『浄土三部経』の中の『仏説観無量寿経』は、家の中でゴタゴタが起きた、それが縁となって仏法に繋が_{つな}った。それを法然さんも親鸞さんも『浄土三部経』としてとても大事にされた。ここに私たちの仏法を聞き開くものがある。順調な時は迂闊_{うかつ}に自分のことを忘れる。

仏法に目覚めるということが、親鸞聖人は道を極められた時に大きないのちのはたらきと気づかれました。ある意味では私たちはヨーロッパ、アメリカの言語でライフ(Life)しかない。いのちはライフ(Life)なのです。ところが私たちは寿_{じゅ}と命_{みこと}と、帰命無量寿と表現します。

そのことについて信國先生は「これが大事だ。この言葉に注目しなければ、無量寿だよ」と机をバンと叩いて「わかつとらんな」とおっしゃっていました。激しい、なんとしても私たち学生にこの無量寿のころ、念仏のころを届けようと。

一方、竹中先生は「念仏したらいいですよ」と。すごい差です。仏法に出遇ってください。私が聞いた仏法はこれだけですが、私たちに目覚めを促している。それから目覚めた人からの目覚めの言葉です。だから呼びかけだ。ただの知識的な言葉ではないのです。呼びかけとし

て聞こえてきますか。それがなかなか呼びかけにならないのです。京都の学院で勉強させてもらって、人生はこういう言葉で考えたらよいと教えてもらいました。それが「出会いとゆきちがい」という言葉です。

信國先生が宗教のことを英語で、アルティメット・コンサーン (ultimate concern) とおっしゃいました。意味は究極的な関心事、蓮如さんの言葉でいうと「このこと一つ」。人生はいろいろありますが、一番大事なことはこのこと一つと。だけど最後は「ここだよ、ここが一番ところが深く念じていることだよ」と。そういうことを私はすっぱくなるほど先生から聞きましたが、耳やところが本当にきちつと真向かないものだから、随分ご苦労かけてます。

自分との出会い

みなさんどうですか。物事を見ていくときに、この目で見たらよい。国際問題しかり。会社の中で、職場、学校、家族の出来事。対人関係。最後は自分との関係。自分と出遇っていますか。自分と一つになって花のように生きていますか。自分でこんな自分が嫌だと行き違っていますか。この言葉は丁寧にあらゆることを網羅

している言葉です。それで、私は大谷専修学院に行き、家族のこと、人生のこと、世界のこと、も考えさせてもらっています。随分、私には世界のこと何が問題なのか少し見えるようになりました。

私は、竹中先生と二十年間ご一緒させていただいたんですが、丁寧な私たちに人間とほとけさんの世界の内容をおっしゃってくれました。「これだけでいいのです」と。二十年間ほとんど全く同じことをおっしゃった。それでも、私は落第なのです。先生はほとけさんの世界はこうなってますと教えてくださった。これがほとけさんの世界ですと。無条件の愛ですと。言葉は聞きました。その言葉が自分の生きることでどう繋がっているのか。繋がってはじめて言葉が生きて働く。聞いて終わりなら知識だけのお話ですから、お寺の階段を降りたら、さようならになりかねないのです。

一緒になんまんだぶつ

専修学院の良さは仏法を聞いて、ほとけさんの窓が開いていたら、こういうことはどういうことなのでしょうかと問題をきちんと受けとめて勉強が出来ることだと思います。全寮制でお

内仏があります。喧嘩をするとみんなそこに行きます。喧嘩する者同士と私が一緒になんまんだぶつ。何があつたのか。一回クツションを置くだけで物事が違って見えてきます。そういう生活を二十年間、いろんな学生さんとおして学ばせてもらいました。やんちゃな学生さんは私の化身です。私は先生ですが根性は一緒です。そこでも教えてもらいました。では、こういうことがどうしてなかなか問題にならないのかと言いますと、私たちは世間では一人前、社会人。人からあまりガタガタ言われたくない。その延長沿いであり運動があつたりします。物事にはみんなに通じる基準があるのに、私が基準だと思っていると平野修先生はおっしゃいます。

家庭からわかること

家庭は心と心がもつとも近く触れあつて住むところであるから、むつみあえば花園のように美しいが、もし心と心の調和を失うと、激しい波風を起こして、破壊をもたらすものである。

(パリ、増支部 三三三)

(『和英対照仏教聖典』四三二頁)

三千年前のインドの釈尊のことばです。納得しますか。納得したらお釈迦さまのさとりがそのまま皆さんにうつるということ。この半偈は「心と心がもつとも触れあつて住むところ」「うん」と頷かれます。それを「聞」と言います。「聴」は日ごろの心で聞きます。「聞」はものの道理として聞こえた。「人の心もむつみあえば美しい」。お釈迦さまは人間の底を見極めておられます。

山陽教区が発行された『羅網』に一休さんと蓮如さんのことが載っていました。

一休さんと、蓮如さんは同時代の人であつた。ある時、一休さんのお寺の前の松の木の側に、この松を真直に見た者に、金五両、を与えると立札が立てられた。彼の時代の五両と言えば大金である。たちまち京都中の評判になり、毎日々々人びとが集まつて、松の木の側をぐるぐるまわつて、どこから見ると真直ぐ見えるかとさがしていた。

そのことを蓮如様がお聞きになって、お弟子の人を使つて、一休さんに五両もらいに行かされた。お使いの人がそのことを一休さんに申し上げると、一休さん

は大きな声で笑いながら、とうとう蓮如が来たか、立札の裏を見ろといわれたので、裏を見ると、但し、本願寺の蓮如は除くと書いてある。蓮如様は一休さんに一杯くわされたと言つて笑われたそうである。答は〇〇と言えよいいのだと仰せられたそうである。如実智（知）見。ありのまま。むかしばなし集より。

（「一休さん」山陽 鼻本 一）

〇〇と言えよいいのだとおおせられたそうです。みなさんにはどんな答えがありますか。一休さんの時代には、正解する者は一人もいなかった。今の時代に、この曲がつた松を真つ直ぐ見よと言われたらみなさんどうされますか。ちようど時間ですので、これについては、午後にお話をします。



「二日目」結願逮夜

午前中お話をしておりました一休さんのことについて、本山の子ども会で九州から来た三、四年生三十人くらいにこの問題を出して、当てたら賞品をあげると。真剣にみんな賞品めがけてグルグル回りだす。回つて上から見たり。そのうち泣き出した。「曲がつとるしか見えんじゃないか、どうしてこんな問題を出すんだ」と言つて。見たら、二日間ほど喋らない静かな子が「こういうこと」。そうだよ。蓮如さんと同じ答えが出ました。「この松、曲がつていると言えよいいんだね」と言いました。曲がつている松を曲がつていると見ることが真つ直ぐに見ることだと。それだけのこと。はい皆さん取り損ねましたね。それで蓮如さん、一休さんは何を言いたかつたかと言うと、私たちの心が歪んでいるということ、真つ直ぐにものを見ることが出来ない心だと。それを素直に認めるかどうかということなのです。

わたしの恵さん

私たちはそう簡単に自分のことを間違つてい

ると言いたくないので、激しく抵抗します。私の妻の恵さんは新婚のころは、学校の先生もしており、三重県で一番美人で（私にはそうでした）しかも歌もうまいです。放送部に入っていたので、きれいな声で、京都から二時間半、三時間かけて車で帰ってくると「お帰りがいい気分です。本当に幸せでした。あれから三十五年どうなったかと言うと、返事も返ってこない状態になりました。朝早く起きてからずっと寝るまでいたいこんな感じですよ。

竹中先生は私たちの「えらび・きらい・見捨てる」の心を違う言い方をすると、「出来るもの、間にあうものは居ていいが、出来ないもの、間にあわないものは居てはいけない」という根性で物事を見ているとおっしゃいました。

私は五十九歳の時、倒れ、六十二歳で心臓バイパス手術をしましたが、三十パーセント程の機能しかありませんので、こける、茶碗を割る、つまずきます。そうなる恵さんの角がメキメキと出てきます。どう出てくるかというと、東京の五年生の子が書いたお母さんのように出てきます。紹介します。

火山、母さん大爆発、またも予知不可能

これが私たちの家族の普段の生活。予知不可能。だからほとけさんが要るのです。ほとけさんがいなかったら、自分の根性がチェック出来ません。お互いにいつも義（ただ）しいと思っっている。自分の根性が曲がっているとは絶対に思えません。皆さんも思えないでしょう。でも、おとなしい、一言も喋らんかった子が「曲っていると見ればいいんですよ」と。すなおですね。

私たちのものの見方

これは名古屋の新聞に掲載されておりました。三重県の「どっちが大事」六十七歳の女性の方。

最近、夫が家庭菜園作りにはまっている。雨が續くとそれを駐車場に持ち込んだ。歩くところが狭くなったので転んでしまった。起き上がれずに夫を呼んだ。助け起こす前に「ああ、俺のナスが」。普通は「大丈夫」でしょう。野菜が出来ても食べてやらない。

この奥さんの心は曲がっていますね。一番の被害者はナスです。ナスが傾いて転がっている

のに、ナスのことを案じている旦那さんと、私を助けてくれないと怒っている奥さんに、「食べてやらない」と言われる。ナスまで被害を蒙っています。これ二人とも曲がった心でドンパチが起きています。それを「ああ、なんでナスと同じくらい嫁さんのことを思っやならなかったらう」と。「なんで狭いところを私はこんな歩き方をしたんだろう」全部ナスに悪かったねと。ナスを拝む状態なのに、ナスを捨てる気持ちになっっている。胸が痛いですね。

いい孫、悪い孫、大事な孫

うちにも孫（まご）がいますが、べつにいい孫でもなければ、悪い孫（わる）でもありません。孫がいるだけです。

私はそういうふうに見ています。いい孫などといっているなら、また悔（く）やまなければならぬことがあります。こんなやつとは思わなかったと、へたをすると泣（な）き言（こと）を言わなければならないことになるから、私はいい孫だとは思っていません。それは近所（きんせう）の人が来たり、それから親戚（しんせき）の連中（れんちゆう）が来てそう言っている。永代（えいたい）経（きよう）でも報恩講（ほうおんこう）でも息子（むすこ）が子どもを三人連れ

て出てきます。そうすると、「いいお孫さんですね」と、門徒のおばあちゃんやらがそう言っている。けれども私はいともなんともないと思っています。いい孫でもなく、悪い孫でもない。大事な孫です。よしあしにかかわらず、大事な孫です。そういうことが言えるのではないですか。私はうちの息子（むすこ）をいい息子（むすこ）だとか、悪い息子だとは思いません。大事な息子だと思っています。いま息子は（じゆう）職（しよく）をやっているけれども、いい悪いは自分の都合（つごう）ではないですか。たいがいそうでしょう。自分の都合（つごう）を離（はな）れて、批判（ひはん）なんかしません。みんな自分の都合（つごう）です。都合のいいことを言ってくれたり、都合のいいことをしてくれと、政治家でもなんでも「あれはいい人だ」と、みなこういうのです。いいも悪いもない。よしあしは自分の都合（つごう）です。自分の都合（つごう）で分別（べつぶん）するから相（あう）が出てくる。姿（すがた）が出てくる。その姿（すがた）によっていいものは取り（と）込むし、悪いものは捨（す）てようと、こういうわけです。

（仲野良俊先生より）

これを仲野良俊先生は、「仏法と世間と両方学ばなければ大変なことになるよ」世間はこういうふうにもものを見ているか。間にあうとか役に立つのです。それで、仲野先生は「世間はこう見とるよ、物事を見る時に、孫を見てもこういうふうに見ているよ」と。どうですか。はじめから良い孫とか悪い孫か、自分に都合よく動いてくれた孫には「良い孫だなあ」。「ちよつと爺ちゃんなんかあつち行け、ふん」。「この前、お年玉やったのに」が出てきます。

そのくらい、孫は好き放題やりますから。私はそのやんちゃな孫が好きなのですけど、仏法ではこうなりません。仲野先生は仏法はこうなるんだと、「やんちゃだろうが、どういう在り方をしていようが、大事な孫なんだ」と。そういう眼差しは私たちからは出てきません。仏法聴聞しておればそういうことを思い出すことが出来て、自分の根性で孫を見とったなあ」とわかっていく、それが大事。

繋がったたくあん

もう一つ小学生の作文を紹介します。

これは十一歳の子の作文で、東井義雄先生の『子どもを伸ばす条件』という本に掲載されている。

ます。

ぼくはおとなのケンカくらいわけのわからないものはないと思う。七不思議の一つだ。何でもないつまらないことで始まるうえに、その起るや疾風の如く、とんでもないところまで発展する。ぼくのうちではよく夕食のときおこる。タクアン一つ一つよくきれていないといつて、おとうさんがブツブツいうと、おかあさんが、あんたの月給いくらだと思うんですか、などという。するとおとうさんは荒々しい声で、お前の世帯もちが悪いからだ、などという。あんなすりへったまな板の上できれいな包丁で切れば、タクアンがつかないのはあたり前なのに、とんでもないことを言いだしてケンカになる。その上あきれたことに「そもそも二十三年前のあの時、柳の木の下でお前と会わなければこんなことにならなかった」などという。すると片方も負けずに「あたしだって、あの時あなたと会ったのが不幸のもとだった」などとわけのわからないことを言いかえす。そして夕食がすんだあとまで重苦しい空気が残

る。そんな時は、妹はプイと立って机に向かつて本を読むようなようすがおなじ頁^{ページ}を眺めているだけで頭に入らないらしい。

ぼくはそつとぬけ出し、近所の友だちのうちへ行つて、おそくまで遊んで来ることにしている。

（東井義雄『子どもを伸ばす条件』より）

これです、たくあんが一つひとつよく切れてないという貧しい時代です。たくあんが繋がっていたらそれを、みんなで四方八方で食べ始めたら、最後まで食べられるのですが、それを金がないせいにしたり、もうとことんとことん自分の根性を、そのように考えてしまいます。それでいろんなことが起きます。

曲がった心と正直な心

「この世にあるものはみんな大事だよ」原田大助君（十一歳）が言っています。「生きている人はみんな大事だよ」これは間にあう、間にあわない、出来る、出来ないは入っていません。そのまま大事です。比べませんし、そういうかたちで優劣をつけません、真つ直ぐ見えています。

だから、この子に見られた大人のお爺ちゃんお婆ちゃんは嬉しい。そのまま見てくれる。これは龍樹菩薩と同じです。

こういう子たちが作る作文を紹介します。一年しまだいっぺい君、

りよかん

しまだ いっぺい

りよかんにはいるとき

おとうさんがぼくに

きょうだけようちえんになりといいました

た

ぼくがなんでつていうと

とまるおかねがすくなくなるからてゆつ

た

ぼくはおとうさんのいうとうりにした

ぼくはこころのなかで

かみさまに

うそをついてごめんなさいといいました

（鹿島和夫『二年一組先生あのおね』より）

お父さんの分まで責任を取っています。こういうのを菩薩と言います。やりすぎ。でもああ、お父さんの気持ちがわかるですね。でも嘘は悪いとわかっているから後で神様にごめんなさい。

もう一つ紹介します。

しんかんせん

しんかんせんにのりました

じゆうせきがいっぱいだったので

していせきにすわっていました

するとしやしようさんがきて

「すわったらだめっ！」

とおこりました

おかあさんは「はいっ」とゆいしました

でも しやしようさんがいつてしまった

らまたすわりました

しやしようさんがいたりきたりするた

びにわたしたちはたったりすわったりで

つかれてしまいました

これからしんかんせんにのるときは

まえもつてしていけんをかってほしいと

おもいます

（鹿島和夫著『二年一組先生あのおね』より）

どうですか。

では具体的に曲がった心と正直な心がぶつかったらどんなふうになるのか。皆さんどうですか。

小三 女の子

父ちゃん。かあちゃんとお金とどっちがいい。

そりや、母ちゃんさ。

一億円でも？

うん。

百億円でも？

うん。母ちゃんはお金には代えられない。

本当、母ちゃんとけんかして追い出そうとしても

心ではやっぱりそう思っているんだな。

私はうれしくなって、やっぱりといって父ちゃんの肩をたたいてやった。

本当、母ちゃんと喧嘩して追い出そうとしてドンパチをやつてるのです。母ちゃんとけんかして追い出そうとしても「心ではやっぱりそう思っているんだな。（この安堵感）「私は嬉しくなって、やっぱり、と言って父ちゃんの肩を叩いてやった」。「父ちゃんの頭を小突いてやった」とは書いていません。皆の心が一つになっていました。このたった一つの、お金とどっちがいい。一億円でも百億円でも、そういう言い方にお父さんは素直に全くストレートに「お前、母ちゃんは金に代えられんぞ」。その言葉を聞いた

時の子どもの嬉しさは、どれだけ喧嘩をしても大丈夫だと。そういうようなことを確認した作文だと思っています。

それから、東日本大震災二年後、理容院の奥さんがテレビのインタビューに出ていて、「私は主人が水門の当番で津波の時に水門を見回ると言ったのに一言も言わずそのまま、旦那は行っちゃって帰らぬ人となった」。あの時どう言ったらあげればよかったか、どういう言葉をかけたらよかったのか考えた。そうしたらこういう言葉をかけてあげるべきだった。「気をつけてね、本当に」これがなぜ出てこなかったのか。今は理容院を開いて、来たお客さんにこの言葉を言っているそうです。

でも一緒にいた旦那さんはこの言葉を聞かずに水門を開けに行つて帰らぬ人となりました。大事なことは後で思い出すのではなく、今、思い出せるか、そういうことを私たちは問われていると思います。

言葉の持つ力

もうちょっとだけいろんな作文を用意してきましたので皆さんに味わってもらいたいと思います。



北海道の古旗さんという女の子がこんな素敵作文を書いていました。

おかあさん

北海道 小三 古旗 裕子

私のおかあさんは

私が学校から帰ると

「おかえりなさい」と

いつもにつこりしながらいつてくれる。

どんなにおもしろくないことがあっても

「おかえりなさい」ということばで

もりもりと元気になる。

おかあさんの

「おかえりなさい」とうことばを

日本中の三年生に

きかせてやりたいなあ

いつも私は考える

「お母さんのお帰りなさいという言葉を日本中の三年生に聞かせてやりたいないつも私は考えます。」と。

私は毎日家に帰ると、養子ということもありますが、必ずただいまと言います。新婚のころはお帰りなさい。あれから三十五年、「ただいま」「シーン」。二回目「ただいま」「シーン」。三回目、「ただいま」返事が返ってきたと思ったら「うるさい」。すごい違いです。もう一つ紹介します。これは『生命の見える時』いのちのまっももかじまる松本梶丸さんの本に掲載されています。

お父さんとお母さんが

けんかした

最初、お母さんがあやまった

お父さんもあやまった

いい親たちでよかった

そういつたら

お母さんが泣きだした

出石小学校一年 田中ひろみ

(松本梶丸著『生命の見える時』より)

謝るのを仏教では慙愧とか懺悔と言います。

根本テーマです。どこでほとけさんに遇えるか、自分の全体が懺悔されるとき、どんなにか威張ってきたな、力んできたな、自分だけを大事にしてきたなとわかるときに初めて、その存在全部を支えている大いなるものに心がいくのでしよう。

ではどうしてこの夫婦はできたのか。松本梶丸さんがこの作文にコメントをつけています。

「夫婦といっても縁がいたれば喧嘩もするだろう。(そのとおり)だが謝るということは至難です。(なかなか謝りません)だから住職になって門徒さんは見えています。お互いに沽券こけんというものがあります。俺が一番だと。謝るといこうとは容易ではありません。お互いの沽券、これは自尊心です。

だから「謝ることで親の権威が失墜するわけではない。むしろその悪かったと謝る親に子どもは安心もし、人間らしい信頼感も生まれるの

である」と。ここまで先生がコメントされてもなかなか心から私たちは謝りません。私も妻に謝るときなんと言われるか。「どうせその場を逃げようとしている。今までやったこと知ってるもん、愛吉さんの謝りはいつもその場しのぎね」。どんどん責められる。そうすると素直に謝ったことが全部消えていく。それくらい厳しい。これは、綾小路きみまろさんがこんな川柳を書きました。

妻の口 一度張りたい サロンパス

あのお喋りな、綾小路さん以上のお喋りをするみたいです。



「三日目」結願晨朝

お念仏から始まる生活

或る年の春、耕しの祭りに浄飯王は群臣を率いて、黄金の鋤にて耕しの式を行われた。太子も伴われて城を出で、野に耕す農夫の様を見たもうたが、ふと犁の端に掘りかえされた虫を、何処からともなく飛んできた一羽の鳥がすぐに啄み喰うたのを見られ、慈深いそのお心は強く痛んだ。「あわれ、生物は互いに食み合うよ」といわれ、悲しみのあまり、傍らの林に入ってこんもりと繁った閻浮樹の下に坐り、深い想いに沈まれた。

（木津無庵著『釈尊伝』より）

お釈迦さまが少年の時に農耕祭というのに行き、土を耕したとき虫が出てきたのを鳥が啄んでるのを見られ「あわれ生き物は互いに食み合うよ」と。それが苦行六年の後、私のはじめの目覚めはあの時だったと。閻浮樹下の瞑想と言われております。苦行は道に非ずとさとられたと信國先生が九州の宇佐のお寺で門徒さんたち

にお話ししておられました。

仏教に衆生観。普通は生きとし生けるもの。

信國先生は同じ一つのいのちを生きるもの、また同じ一つの願いを生きるもの。そういういい方でもう一つ深めておられます。そういう言葉が私たちの生活と日常とどこで繋がるか。こういう感覚が私たちにいつどうやって聞こえてくるか感じられてくるか。それなくしては仏教ではないです。お話しをして終わってしまう。ところが、小さい子どもたちは三千年前と変わらぬ衆生観を持っていると思います。

自分中心になった感覚

私たちは日ごろに心を中心にしていて、他や全体が見えません。でも他や全体が見えるところに立たされますと、「他や世界はこうなっているんだ」と。信國先生はそんなふうに私たちにお念仏の世界を言葉で教えてくださっています。

そういうことが、三十八年前、一九八一年に浄土系の学校の先生でお坊さんだった無着成恭さんという方が『ヘソの詩』という本を書かれ、その中に無着さんの生徒だった、六年生の青木裕香子さんの言葉を紹介されています。

いただきます

六年 青木裕香子

ごはんを食べるとき

手を合わせて

「いただきます」っていうのは

あなたのいのちをいただいて

生かしてもらってますっていうことなんです。

（無着成恭著『ヘソの詩』より）

といい切っています。この子の中に無着さんが「いのちはね、いただいて生きているよ。殺して生きているよ」と切ない話をしたとき、この子の心に入り、ものの見方が変わった。しかし、私たちは、そういう見方がなかなか出来ません。私はこういうのを読んで「感性が素晴らしい」と思います。

テレビを見ていたら大阪の肉屋さんが面白いことを言っていました。

生きものが食べものになる悲しみを通して本当の「いただきます」「ごちそうさま」が言えますよ。

（ある肉屋の店主の人の言葉）

ええ、生き物は食べ物になる悲しみをおし
て本当の『いただきます、ごちそうさま』が言
えますよと、あまりに面白いので私はそこに鴨
肉を注文して食べました。



〈三日目〉結願日中

願われて

初日にここで御文が読まれました。今朝、読
まれた御文の中に「信心決定」という言葉があ
ります。報恩講は「信心決定」の時だと。私を
はじめ、皆さんも「信心決定」されましたよ
うか。それが報恩講で唯一願われて、先祖から
も、ほとけさんからも、無数の先輩たちからも
願われています。それほどに私たちに信心を薦
めるいわれがあります。「信心決定こそ、人と生
まれた本来の目的がそこに成就されているので
すよ」と。お釈迦さまが仏陀になられたときに
正覚、正しい覚りを得たということを言われて

それが仏法、仏教となって今日まで私たちの手
元に届いておりますが、それは「信心決定」と
いう言葉で最後に表されております。

四海の内みな兄弟

では「信心決定」とはどのような内容か。こ
れは蓮如上人が

仰せに、「身をすてて、平坐にて、みなと
同坐するは、聖人のおおせに、「四海の信
心のひとは、みな兄弟」と、仰せられた
れば、われも、その御ことばのごとくな
り。また、同座をもしてあらば、不審な
ことをもとえかし、信をよくとれかし
と、ねがうばかりなり」と、おおせられ
そうろうなり。

〔蓮如上人御一代聞書〕真宗聖典 八六二頁

「信心の人は四海の内みな兄弟」と。これが覚
られた内容だとすつきりと言われています。

竹中先生は、念仏の世界というのは同一に念
仏して別の道が無い故に、遠く通ずるに四海の
内皆兄弟、四海というのはこれは全衆生ですよ、
日本人全部が兄弟だ。日本人だけでないです

よ、全人類が兄弟だ。人間だけでない、空を飛
んでいるカラスであつても、大地をはつてるヘ
ビであつても、全部同じ一つのいのちを生きて
るものであるがゆえに、それは兄弟だと。これ
は念仏の世界です。だから魚に対しても、やは
りすまんなあということです。殺してそれでい
いということではないですね。一本の松を切つ
てもすまんなあということです。松や魚はけつ
して物じゃないです。これは同じいのちがつか
がっているものだという、これは念仏によって
開かれてくる世界です。だから念仏によって開
かれてくる世界だけが実は四海の内皆兄弟です
と。「これは念仏の世界です」と。こういうふう
に念仏に出遇った人、阿弥陀さんの心に出遇つ
た人は、その世界を私たちに言葉として提示し
てくださっています。あとは私たちがそれを聞
いてそのとおりだと領けたときに、ここに信心
が誕生してそういう眼差しや、ものが見えてく
るのです。

開かれてくる世界

竹中先生がこういう念仏をいただいた世界は
どうおっしゃっているのかと言うと、「魚に対し
てもやはりすまんな」と。食べることを。獲る

こと。同じいのちですから。殺してそれで良いということではないのです。一本の松の木を切ってもすまんなということです。松や魚は、決して物ではないのです。同じいのちで同じことをしています。「念仏によって開かれてくる世界だけが、実は四海の内みな兄弟だ」と蓮如上人が言われることと一つになっています。今の時代になっても念仏に遇っている人が、きちんと言葉を残してくださっています。御同行、御

同朋と一緒に。そういう世界が開かれています。

蓮如上人が本当に頑張つて報恩講を開いて「聞きなさい」「あなた一人の願いでないよ」「生きとし生けるものの願いが、あんと何人もここに聴聞しとるんだよ」「全衆生の願いがお一人おひとりにかかっている」と教えてくれたのだと思い、わからないなりに感動しています。こういう世界がお浄土から開かれてきて、そうだが、そういう世界をみんな生きあうことがこの世に生まれた生きがいだ。ただ私たちはどうなっているかというところ、ここから真宗の教えの厳しいところです。

仏との出遇い

一休さんがこんな文を書いています。これは

『同朋』という月刊誌に載っており感動しました。

乳飲み子の 次第次第に 知恵づきて
仏に遠くなるぞ 哀しき

赤ちゃんのころがほとけさんに一番近い。無邪気、無心。ところが赤ちゃんに自覚はない。けれど実際そう思つて生きています。それを一休さんは知つたのです。覺つていないけど同じだ。感動されてそれを言葉にされた。大人になるほど遠くなるぞと哀しき。ほとけさんの世界からズレてるな。それがどこでわかるかというところ、ほとけさんに出遇つたからわかる。出遇わなければ自分はズレてないと思いません。

わがいのちすなわち無量寿なり

『安心決定鈔』に

しらざるときいのちも、阿弥陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしこざしく自力になりて、「わがいのち」とおもいたらんおり、善知識「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよ」と

おしうるをききて、帰命無量寿覺しつれば、「わがいのちすなわち無量寿なり」と信ずるなり

(真宗聖典『安心決定鈔』九五九頁)

小さいときはそういういのちを生きておるのだけれども、気がつかないでやっている。一休さんと同じです。頭で考える。俺は俺だ。そういう哀しさが人間にはある。わがいのち。ここにわたしたちの世界がある。私のいのちだ。自由にしていい。自分のいのちは自分のものだ。決め込んでいます。さらに「善知識」これが親鸞聖人や蓮如上人や念仏に目覚めた人。信ずるはそうだと本当に領く。本当に知るという意味です。今の信ずるは自分があつて相手があつて信ずる。裏側に疑いが残っています。本当に領く信ずるは疑いが無い。これは目覚めた人から私たちに對してのメッセージです。素直に無量寿の心に出遇うかというところではありません。一回くぐる必要があります。皆さんも今日、門をくぐつてこられた。真宗の入門というのは本山で行われております。それが帰敬式とか得度式とかになるかもしれませんが、世間も皆ここで悩んでいます。

ある三重県の四年生の男の子は「大人もまち

がえることがあるから、きちんとあやまっても「いたい」と。新聞やテレビでニュースを見ても大人は誰も謝らない。これは唯一の注文です。これは一休さんと同じです。哀しい。何で大人は謝らないの。謝りません。たとえ謝っても信頼してもらえません。冷たい仕打ちが返ってきます。松本梶丸さんの言われるように「至難です」ね。

知恵づきて

この前、私のところに孫がやってきて本堂で勝手にカンカンと鳴らして『帰命無量寿如来』と、「じいちゃんつぎ」と。そして終わったら颯々と帰っていく。私は足が不自由でぎこちなく歩きます。そしたら孫も同じように真似して歩きます。小さい子は真似するのが得意です。そこまではよかった。夕方、娘が帰ってきて、恵さんと台所で食事の準備をしていました。恵さんは娘が帰ってきて調子にのっていました。なんだか機嫌が悪くなったのか、知恵づいてこう言われました。「愛吉、早く来い」。いつもの「さん」がなくて私は、煩惱がたぎって許さんぞ、と憎悪が出てきました。するとまた台所から声が聞こえた。「愛吉、早く来い」。孫です。

孫の声には「はい」。この違いはなんだろうと考えました。三十五年連れ添った恵さんには腹が立ちます。煩惱が煮え滾ります。たまたまた四歳の孫は「愛吉、早く来い」。それには嬉しくて「はい」と。これは乳飲み子と知恵づきの違いです。

毎日どこかで私たちは気づかずにやっているのですが、それを自覚的に学ぶということが報恩講の大きな仕事です。なかなか私たちは自身に気がつきません。だから教えを聞いて知らされていくのです。米沢英雄さんはこう言われます。

自分の得手勝手で、純粹無垢の世界に色をつけて汚れているから穢土といわれるのです。本来穢土はないのですが、自分の都合で（これを自我というのですが）でっち上げた世界を、私たちは見ているのです。

（中略）

私たちの妄想を気づかせてもらうはたらきをするのを浄土というようです。浄土があるかないかということよりも浄土によって目を覚まさなければ、人間はでっちあげの世界を真実だと信じて、永遠に

間違いを繰り返していくではありませんか。

（米沢英雄『心の詩』より）

厳しいですが私は感じるとうるさくあります。最後、歌で終わっておきたいと思います。「二人は若い」という昔の歌があります。歌詞にいのちのこだまなことが書いてあります。皆さんで合唱して終わります。

（了）



「イタイイタイ病に学ぶ」に参加して

【二〇一九年八月二十六日】
会場 イタイイタイ病資料館

イタイイタイ病に関する学習会としては三回目となる今回は、「イタイイタイ病対策協議会」会長の高木勲寛^{たかぎくんにひろ}氏から、イタイイタイ病の裁判、それから五十年の歩み、現在とこれから等を聞かせていただきました。

この中で強く心に残っていることは、この裁判が無謀な挑戦としてスタートしていることです。三井金属鉱業相手に裁判などして勝てるわけがない、普通は訴えたりしない、負けた後のことを考えればそんな無謀なこととはできない。それでも訴えねばならない。こうして始まった裁判でした。この裁判は、三井金属鉱業との戦いではあるが、一面、世間の「普通」という価値観との戦いでもあるのではないかと感じました。事実、裁判の間も「(裁判を)やめろ」という意味の脅迫めいた声がずっとあったと聞きしました。その中で勝訴をした、そのような裁判であったことを今回初めて受けとめることができました。

このたびの学習会が特にあぶり出したのは、

このイタイイタイ病の問題に無関心だった自らの姿でした。いわれなき偏見、差別の根っこにはこの無関心があるのかもしれない、漠然とそう感じています。そして、同じ地に住む私に、「何を見て、何をしていくのか」と問題を提起しています。

第十組 浄光寺 齊藤 弘顕

【二〇一九年九月十三日～十四日】 第11回真宗大谷派ハンセン病問題 全国交流集会に参加して

会場 サンシップとやまほか

第十一回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会が九月十三日(金)～十四日(土)に富山市安住町にある富山県総合福祉会館(サンシップとやま)ほかで開催されました。両日で全国のハンセン病回復者やその家族、ハンセン病問題に関わる方々約四百名がご参加くださいました。

大会の最後には「第十一回交流集会宣言 富山宣言」(以下「富山宣言」)が読み上げられ、割れんばかりの拍手が会場に響き採択されました。この富山宣言は今回の交流集会の意味と、今後の関わりの方角性を宣言したもので、交流

集会後に毎回読み上げられるものです。

この宣言文は当日直前まで加筆・修正が加えられて何とか読み上げに間に合いました。準備期間の「ハンセン病問題基礎講座」や富山教区・高岡教区全組での「出前講座」を経ての課題の共有と、交流集会当日の被害を受けられている当事者の方々からの言葉をどう聞いたのかを表現することに苦労しました。富山宣言の中での「回復者とその家族が関係を取り戻してゆくには何が必要なのか。ハンセン病家族であることを隠す必要がない」地域社会をどのようにつくっていくか、という課題に込め続けたいと思います。」という二点で何とか表現させていただいたように思います。

一つ目では、関係を取り戻していくには回復者の方とご家族間での関係修復はもちろんですが、その方々が生きている地域・社会を形成する「私」の生き方が問われていきます。

二つ目の言葉は、今回の講師の黒坂愛衣氏の言葉ですが、差別を無くすということは、「ハンセン病問題」という言葉で示される事象が差別の力を持たなくする社会の実現ということが願われています。ハンセン病にかかったことや、その中を生きてきた歴史は変えようがありませんし、変える必要もない大切な人生です。まし

てや恥すべきことでも、隠すべきことでも本来はないのです。それを隠させたものは何なのか、恥ずかしいことと思わせているものは何なのかを問いかけています。

真宗の教えではそのことをしっかりと私の生きる姿としてその問題を示してくださっています。そしてその問題を超越する生き方を教えてくださっている言葉を私たちは聞いてきました。

これから改めて交流集会の報告を様々な形でお知らせさせていただく機会があると思います。ハンセン病回復者の言葉に、ハンセン病回復者の家族の方の言葉に真宗の言葉を聞き取っていききたいと思います。富山での交流集会は終わってしまいましたが、この富山から・私から始まっていく歩みを始めていきましょう。

第十組 正覺寺 見義 智証

* * *

今回、九月十三・十四日に開催された「真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会」に参加したのは、格別の思い入れがあったわけではなく地元での開催であることと宗議会の「人間解放交流学習会」に指定されていたからです。

しかし、参加して回復者の皆さんの体験や思い、療養所の現状等をお聞きし、交流集会のサ

ブテーマ「病そのものとは別の苦しみ」に込められた意味を考えさせられました。ハンセン病家族訴訟では患者本人だけでなく、その家族に対する差別被害を認める判決が下されました。患者本人にとっては自分の発病によって家族までもが差別されるという「病そのものは別の苦しみ」の存在が認められたということだと思います。ここで見逃してはならないのは、この差別をしたとされる人々は私たちと同様の、わが身と家族が可愛いごく普通の人々ではなかったかということです。現在の物差しで過去の人々を批判するのではなく、過去の物差しをわが身に引き当て、「差別をしてしまうかもしれない自分」を見出すことが大切だと思わされました。

貴重な機会であったと思っています。運営にご尽力下さった多くの関係者にお礼を申し上げます。

第十二組 照善寺 轡田 普善



ショートレクチャー



リレートーク



講義 黒坂 愛衣氏



交流懇親会 於：オークスカナルパークホテル

第11回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会

富山宣言

1996年、真宗大谷派の「謝罪声明」に、「教え＝ことば」が常に人間回復・解放の力と成り得るような生きた教えの構築と教化を宗門の課題として取り組んでいくことをここに誓う」とあります。「謝罪声明」の「ことば」と、今回の交流集会での「出会い」と「ことば」から、二度と同じ過ちを繰り返さないための歩みを進めていくことを宣言した富山宣言が採択されました。

宗教者は、ハンセン病と同様に「業病」という言葉で、人生をあきらめさせ、人間としての尊厳を奪ってきた責任に対しては未だ応えていないというほかありません。このことに応える歩みを始める立脚地を、ハンセン病とイタイイタイ病の現状から教えられました。私たちが世間の「当たり前」や「普通」に立って、そうではない存在を「異質」としていく生き方。その生き方がハンセン病でいえば、ハンセン病の発病者の医療のためではなく、非発病者の「安全」のために、発病者の隔離を目的とした法律を生み出し、その後押しをしてしまったのです。他者を排除することで自身の安全を確保する生き方が、いかに多くの人の尊厳と人生を奪ってきたのかを知らされました。患者本人もその家族親族も、病そのものの苦しみだけでも想像を絶しますが、それとは別の苦しみも与えてきたのです。回復者とその家族が関係を取り戻していくには何が必要なのか。ハンセン病家族であることを隠す必要がない地域社会をどのようにつくっていくか、という課題に応え続けたいと思います。

1996年に真宗大谷派から出された「謝罪声明」の中には、「教え＝ことば」が常に人間回復・解放の力と成り得るような生きた教えの構築と教化を宗門の課題として取り組んでいくことをここに誓うものです。」とあります。それは宗祖親鸞聖人の教えのことばが、あきらめと隔離・分断を生むことばではなく、人間を尊敬することによって自らを解放せんとする運動であり、それは目の前の一人の人と出会い続けていくということです。

この「謝罪声明」の「ことば」と今回の交流集会での「出会い」と「ことば」から、もう二度と同じ過ちを繰り返さないための私から始まる歩みを進めていくことを、ここに宣言します。

△富山宣言 一部抜粋▽

教区だより

(敬称略)

住職任命

(二〇一九年七月一日～十二月三十一日)

二〇一九年九月二十八日

第十一組 西養寺 篠原宣雄

得度

(二〇一九年七月一日～十二月三十一日)

二〇一九年八月四日

第十組 寶藏寺 藤谷由美子

第十組 寶藏寺 藤谷優羽

第十一組 西光寺 神田龍太郎

二〇一九年八月七日

第十一組 岩隆寺 金山光哲

二〇一九年九月六日

第十一組 善覺寺 丹澤樹

二〇一九年十月九日

第十三組 圓林寺 林真一郎

教化日誌

(二〇一九年七月一日～十二月三十一日)

7月

9日 『如大地』編集会議、声明作法講座

10日 教区教化委員会「総会」

11日 教区割当審議委員会、教区門徒戸数調査委員会

15日 ご命日のつどい【赤田見心氏】

16日 青少年教化小委員会、ハンセン病問題全国交流集会富山準備会

18日 教区会参事会、教区門徒会常任委員会、教区改編委員会

19日 あいあう会

23日 通教区会、教区門徒会合同会、声明作法講座、サマーキャンプ富山(27日)

29日 富山別院晩天講座(31日)、社教公開講座事後研修会

8月

1日 戦死・戦災死者追弔法要兼申経法要(八一法要)

2日 正副組門徒会長協議会、正副組長・組門徒会長会合同会

5日 第五十九回児童研修大会(7日)

6日 声明作法講座

7日 教区坊守会事前学習会

9日 ハンセン病問題全国交流集会富山準備会

19日 第十一組組会

20日 第十一組組会

22日 第十一組組門徒会

23日 大谷大学同窓会公開講座【村山保史氏】

26日 第十三組組門徒会、ハンセン病問題全国交流集会事前学習会

27日 『如大地』編集会議、声明作法講座

28日 ハンセン病問題全国交流集会運営委員会

29日 第九組組会

30日 教区同朋の会「総会」、あいあう会

9月

2日 第十二組組会

3日 第九組組門徒会

5日 第十組組会

6日 第十組組門徒会

9日 第十二組組門徒会

10日 声明作法講座

11日 寺族研修小委員会

13日 第十一回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会(14日)

15日 ご命日のつどい【大伴慎介氏】

10月

17日 儀式作法講習会

18日 門徒研修小委員会

19日 『如大地』編集会議

20日 別院報恩講音楽法要合同練習

22日 富山別院彼岸会(24日)

11月

1日 式支配所係役会/助音方習礼/報恩講リハーサル

2日 境内清掃

3日 仏具磨き/帰敬式役係会・準備

4日 報恩講立華

5日 富山別院報恩講事前準備

6日 富山別院報恩講(8日)

15日 ご命日のつどい【見義智証氏】

16日 富山・高岡教区改編地方協議会

17日 『如大地』編集会議

12月

6日 教区同朋の会報恩講、帰敬式リーフレット作成委員会

13日 第十一回ハンセン病問題全国交流集会反省会

14日 『如大地』編集会議

15日 ご命日のつどい【高谷純夫氏】

19日 富山県教誨師会「総会」

21日 真宗本廟報恩講(28日)

27日 宗祖親鸞聖人御正忌法要「ご満さん」(28日)

3日 真宗仏事研修会

4日 結の会

5日 富山別院公開講座

7日 子ども報恩講

9日 部落問題研修会【アンドレ・デ・アントーニ氏】

10日 あいあう会、ハンセン病問題富山協議会

11日 教区坊守声明講習会

13日 寺族研修小委員会

15日 ご命日のつどい【生地眞氏】

16日 帰敬式リーフレット作成委員会

17日 青少年教化小委員会

18日 教区改編委員会、組織拡充小委員会

19日 院内報恩講、解放運動推進協議会

24日 『如大地』編集会議

25日 社会教化小委員会

26日 門徒研小委員会

教務所 人事異動

新任のご挨拶

富山教務所主計 岡本 智裕



去る八月一日付けで富山教務所主計を拝命しました岡本智裕と申します。前任地は、本山の組織部で、京都教区の出身です。着任して四ヶ月が経過し、主計の職務にも少し慣れてきたところです。若輩者でありますので教区の皆様にはご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、精一杯頑張っていきたいと思いますので、ご指導ご鞭撻賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

転任のご挨拶

財務部主事 藤宗 智秋



このたび、八月一日付をもって宗務所財務部主事を拝命いたしました。

富山教務所では、四年十か月の間、主計の職務を務めさせていただきました。その中で、会計業務に加えて、いろいろな会に携わらせていただいたこと、多くのご寺院へご訪問し、様々なお話をお伺いさせていただいたこと、お伺いできる方がおられない寺院の現状を目の当たりにし、各所へ連絡を試みたことなど多くの課題と貴重な経験を賜りました。皆様には、大変お世話になり、本当にありがとうございました。

新任地においても、富山教務所での経験を糧に精一杯精進してまいりたいと思います。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。略儀ながら書中をもって転任のご挨拶とさせていただきます。

敬 弔

ご生前のご功労を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。

《住職》

第十一組 圓照寺 住職 松倉 義夫
二〇一九年八月一日 寂

第十一組 光蓮寺 住職 宮尾 嘉壽
二〇一九年十月十一日 寂

第十組 慶念寺 前住職 岩崎 榮峰
二〇一九年十一月二十九日 寂

《坊守》

第十組 專福寺 坊守 今湊 一江
二〇一九年七月十八日 寂

第十一組 竹願寺 前坊守 松井 三夜子
二〇一九年九月六日 寂

第十組 聞成寺 前坊守 桃井 たけ子
二〇一九年十月六日 寂

第十組 蓮光寺 前坊守 密山 宏子
二〇一九年十二月十日 寂

第十一組 淨教寺 坊守 石川 壽喜乃
二〇一九年十二月十三日 寂

第十一組 佛念寺 前坊守 神涼 美智子
二〇一九年十二月十六日 寂

編集後記

次の慣用句は、どちらの意味で使われるでしょうか。

【問1】 慇懃（ふげん） 慇懃として立ち去った。

ア. 失望してぼんやりとしている様子
イ. 腹を立てている様子

【問2】 御の字（例文 七十点取れば御の字だ。）

ア. 一応、納得できる
イ. 大いに有り難い

【問3】 砂をかむよう（例文 砂をかむような思いがした。）

ア. 悔しくてたまらない様子
イ. 無味乾燥でつまらない様子

平成三十年度の「国語に関する世論調査」では、右記のいずれも本来の意味とは違う方が多く選択されたそうです。

言葉は時代とともに変転していくものでしょうが、面と向かって話していれば、話し手の様子や会話の流れから判断したり、その場ですぐに意図を確認したりすることもできます。私たちが日頃の生活の中で言葉のゆらぎに不自由を感じることはあまりないかもしれません。

しかし、対話と違って、誌面というものはどうしても一方的になりがちです。言葉の選び方一つ、表記の仕方一つで、読み手の受け取り方を大きく変えてしまうこともあるでしょう。「如大地」編集会議では、読み手に読み間違えや誤解が生じにくいように、また少しでも内容が分かりやすいようにと、一つ一つの言葉を丁寧に推敲しています。そのことの成果がこの誌面上に表れていけばなによりです。

これからもいっそう読みやすく有益な誌面作りをしていきたいと思っています。お気付きのことがありましたらどんな小さなことでもよいので、同封のアンケート用紙にてお知らせいただきますようよろしくお願いします。

※なお、冒頭の慣用句の問いの答えはアンケート用紙に記載してあります。

第十二組 長安寺 庭田 龍信

『如大地』第146号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。

第59回

児童研修大会

於：第11組 西光寺
東福寺野自然公園（滑川市）

2019年8月5日から7日にかけて、「新しい自分をみつけよう」というテーマのもと、小学3年生から6年生まで29名が参加し、第59回児童研修大会を開催した。

子どもたちもスタッフも一緒になっておつとめをし、おはなしを聞き、そしてパークゴルフ、天体観測、竹人形作り、ポイントハイクなど、それぞれの企画（活動）をとおして、テーマを活動として表現することに努めた。



記念写真

1日目



開会式



仏さまのお話（絵本）



夕事勤行



食事

2日目



パークゴルフ



竹人形づくり

3日目



ハイク